

# メタファーを通しての理解と知識

—コトバという形式知と身体知としての暗黙知—

渡邊美代子

Understanding and Knowledge Seen in the Structure of Metaphors:  
Words as Formed Knowledge and Bodily Knowledge as Tacit Knowledge

Miyoko WATANABE

**Abstract.** According to M. Polanyi, “our message had left something behind that we could not tell, and its reception must rely on it that the person addressed will discover that which we have not been able to communicate.”<sup>1)</sup> The explanation of his statement can be found in the structure of metaphors because they provide us with a partial understanding of things; in other words, they hide other aspects of the concepts. Metaphors help us understand the surrounding world and a language is metaphorical by its very nature. This paper discusses the relationship between the structure of metaphors and the tacit knowledge from a cognitive linguistic viewpoint.

Keywords: metaphor, tacit knowledge, formed knowledge, bodily knowledge, qualia

## はじめに

人という認識主体は、コトバという手段で渾沌から知を掬い上げている。しかし、コトバは穴だらけの柄杓のようなもので、知のすべてを一度に掬い上げるものではない。コトバという形式知に変換できたとしても、暗黙知が残されてしまうことは認められている。そして暗黙知というのは、認識主体の理解の仕方であるメタ

ファーの意味構造と無関係ではない、と筆者は捉えている。暗黙知については、認識主体の主観であるため、現在の科学が扱えない領域の現象であるが、メタファーの性質からつくり出される意味構造を通して、アナロジーとして把握することができるのではないかと、思惟されるのである。

この小論文では、認知意味論の見地から、言語という認知機構を通して人という認識主体の理解とはいかなるものかについて議論する。渾

沌から知をコトバで掬い上げるとは、どういうことであるのか。つまり、何を手掛かりにコトバという形式知へ変換されるのか。また、コトバという形式知に置き換えても、暗黙知が残ってしまうのは何故か。これらの疑問について、言語は本質的にメタファーであるという観点から、メタファーの性質との関係性において考察を加えるとする。メタファーとは、すでに獲得した知識を用いて、未知のものを理解する認知方略である<sup>2)</sup>。同時に、身体知並びにクオリアに対して認識を深める。なぜなら、これらの経験知はメタファーの形成に深くかかわるとともに、メタファーの意味獲得に肝要な役割を担う、というように見ることができるからである。

言語学の目的は、言語研究を通して人間の思考を解き明かすことであり、認知言語学においては、言語を認知機構として捉え、人間の情報処理における認知プロセスと関連づけて言語研究が行われている<sup>3)</sup>。そして意味の問題は言語研究の中核であることから、認知言語学の中心に据えられるのが認知意味論であり、その目的は、コトバを媒体とする世界認識における意味づけの営みを究明することである<sup>4)</sup>。

## 1. コトバと知識のギャップ

「コトバを知っている」と「コトバの意味を理解している」とは、等価ではない。前者は単に語彙を有している、またそれを用いることができるということであるのに対して、後者はそのコトバが指し示す実態を理解していることであるから、認識の深さもしくは質という点で基本的には区別されなくてはならないものである。例えば、「茶道というコトバを知って

いる」と、「それを行う」とができることとは、別ものである。更に、次の例はどうだろう。

(1) 野菜をさっと茹でる

(2) (ウナギの) 子が育つ海、将来の親がすむ川、両者が行き交う河口付近が健やかでない  
と幻の魚になりかねない<sup>5)</sup>

(1) の「さっと」は、非常に短い時間であると認められるものの、一体何秒くらいなのか。また、(2) の「河口付近が健やか」というのは、水質や自然環境の保持のことであろうと考えを巡らすことはできるものの、具体的にどのような状態を指すのか。つまり、コトバは指示機能を有するものであるから、ある程度の理解に導いてくれるものであるが、その先の意味というのは、認識主体が経験や想像力を駆使して獲得しなければならない。要するに、コトバは代表的な形式知ではあるものの、コトバと知識とは基本的には区別されなくてはならないものであると認識される。では、コトバの意味というものを知識として捉えるのかということになるが、意味問題は現時点では未解決であるため言及の憚れるものの、誤解を恐れずに言うならば、知識が意味を紡ぎ出すというように筆者は捉えている。

意味というものは、本質的には心理現象であるため、客観的に、正確に捉えることの難しいという問題を孕んでおり、意味の捉え方について定説はないというのが通念である<sup>6)</sup>。認知意味論において、意味とは、コトバというコードを受けて認識主体が紡ぎ出すものであると理解されている。極端な言い方をすると、コトバは

コードであって、コトバの中に意味はないという考え方である。認識主体はコトバの習得とともに、それに関する経験の記憶——生命体として人があまねく経験する知識から稀有で固有な知識に至るまで——を身体もしくは脳に蓄積する。その経験の記憶にアクセスするのが、コトバであると捉えている<sup>7)</sup>。因って、意味づけというのは、個々人の間で同じというわけにはいかないという見方である。

しかしながら、認知意味論では、コトバと意味の関係が恣意的であるという見地には立っていない。(言語の恣意性については、第5節で議論する。)コトバというものが認知機構であることを踏まえれば、認識主体の理解のあり方に則って言語の構築は行われていると考察を加えることができる。因って、コトバには意味を引き出しやすい仕掛けが施されているに違いないと思惟される。

## 2. 形式知としてのコトバ

人という認識主体は、環境世界における情報をコトバという手段で掬い上げてきた。結果として、人が一生かかっても覚えきれないほどの語彙数に膨らんでいるが、それでもまだ言語化されていないものの方が圧倒的に多いと言われている<sup>8)</sup>。

環境世界から掬い上げた知は、形式知と位置づけられる。形式知とは、言語、数字、身体的動作、絵、表などを用いて伝達可能な知識、及び他者の実技から見て取ることのできる技術や技能といったものが含まれる。これに対して、形式知として掬い上げることの難しい知識として、暗黙知の存在が指摘される。

### 2. 1. 暗黙知と形式知

暗黙知 (tacit knowledge) とは、ポラニー (Polanyi, M.) の提唱する知識に対する考え方である。彼は、人間の知識について、「我々は語ることができるより多くのことを知ることができる」と述べ、通常は「知識の大部分は言葉におきかえることができない」と指摘している<sup>9)</sup>。

暗黙知とは、一言で言うと、形式知になっていない知識である。例えば、コツや勘といったものはコトバで説明することのできない無形の知識であり、他者に伝えることが難しいため、個々人が実習や訓練を通して体得するしか術のないものである。大崎は、個人が習得して身体内に有している知識を「内面知 (= 内面化知識)」と定義し、3種類の階層のあるものとして捉えている。

(a) 表出伝達可能な知識

暗黙知 { (b) 表出不可能だが伝達可能な知識  
(c) 表出伝達不可能な知識

(a) は言語、数字、身体的動作、絵、表などを用いて伝えることのできる知識である。他方、(b) は言語化できないものの、体験を共有しているため、伝達可能な知識であり、味覚や嗅覚に関する知識などはこれに該当する。(c) というのは、個人的な、特有の体験の中で感知するものの、表現方法がないため、他者に伝えることができない知識を指す。例えば、自転車に乗るコツ、スポーツの妙技、匠の技、禅の悟りの境地などがあげられる。大崎は、(c) のみを暗黙知として位置づけている<sup>10)</sup>。これに対して、筆者は、(b) と (c) を暗黙知として捉え

ている。なぜならば、(b)の知識は、人という認識主体があまねく経験している身体知ではあるものの、言語化できないという意味において、形式知に置き換えられていないわけであり、渾沌の中に位置していると思惟されるからである。また、個々人の感性というのもさまざまで、言外の知を察知するか否かは個人差が大きいと判断されるためである。加えて、(b)と(c)に関しては、暗黙知の中の階層性であるというように捉えることができるからである。共有の体験から容易に伝わる暗黙知もあれば、特有の経験であるため伝達し難いものもあるというように連続体を成す、と筆者は捉えている。したがって、人という認識主体の知識は、形式知と暗黙知から成り立っており、暗黙知については少なくとも二つの階層性——伝達可能な暗黙知とそれが不可能なもの——を指摘することができる。図式で表わすと、図1の通りである。

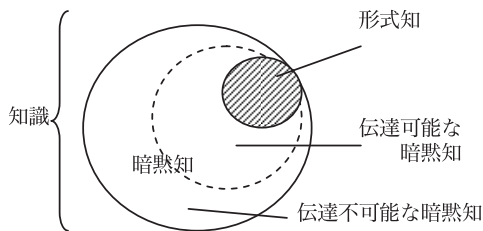


図1. 形式知と暗黙知

暗黙知を掬い上げる、つまり表出させると、形式知として顕現する。その際、表出の手段として一般的に用いられるのは、コトバである。野中と竹内によると、

表出 (externalization) とは、暗黙知を明確なコンセプトに表すプロセスである。これは暗黙知がメタファー、アナロジー、コンセプト、仮説、モデルなどの形をとりながらし

だいに形式知として明示的になっていくという点で、知識創造プロセスの真髄である。我々は、あるイメージを概念化しようとするとき、たいていは言語を用いる<sup>11)</sup>。

である。しかし、コトバというのは、穴だらけの柄杓のようなもので、物事に関する知の総てを一度に掬い上げるものではない。要するに、暗黙知の表出において、コトバは有用であると同時に、つたない手段でもある。

## 2. 2. コトバはすべてを伝えない

暗黙知を形式知として表出するにおいて、コトバというものが主要な、有用な手段であるものの、それは総てを伝達する手段にはなりえない。コトバの先にある意味の獲得については、コトバの受け手に任されている。ここに、ポラニーを引く。

……単語がなにを意味しているかを我々が教えたいと思っている相手方が、知的努力によってうめなければならぬものである。言葉を用いたとしても、我々には語ることでできないなにかがあとにのこされてしまう。それが相手に受けとられるか否かは、言葉によっては伝えることができずにのこされてしまうものを、相手が発見するか否かにかかっているのである<sup>12)</sup>。

野中は、経営における知識創造という観点から、この現象を指摘している。

個人に内在化され、言葉で表現することが困難な暗黙知を組織にとって有益な情報とし

て明示化させ形式知に変化していくためには、暗黙知は何らかの形で言語に翻訳されなければならない。企業でいえば、暗黙知はしばしば現場の経験から生まれる意味のある経験的知識であるが、それが個人の「勘」に留まっている限り、組織的には共有できる知識とはなりえない。しかし、暗黙知がいったん明示化され、形式化されると、その形式知を通じて新たな暗黙知の世界が開かれる<sup>13)</sup>。

暗黙知を掬い上げるにおいて、言語化は有効な手段であるということが出来る。しかし、コトバを用いたとしても、残されてしまう知があるというのはどういうことか。その答えは、コトバというものの性質にあると思惟される。

赤羽によると、言語の大部分が比喩であり、コトバはすべて本質的に隠喩であるという<sup>14)</sup>。この見解を踏まえれば、コトバは実態を映し出すものではない。つまり隠喩による伝達というのは、事物の全体像のやり取りを意味しない。認識主体は事物の顕著な面を捉えて言語化し伝えようとし、そして受け手はその顕著性を手掛かりに心中にイメージを立ち上げてことを理解しようとする。その際、事物の全体像を把握することができるか否かは、受け手の身体知やクオリア体験といった経験知、もしくはそれを基盤とする想像力にかかわると推すことができる。

コトバの大部分を占めると言われる比喩の性質及び構造から、アナロジーとして知の構造というものを窺い知ることができるのではないかとこの筆者の趣旨を再確認し、これより比喩について議論を進めるとするが、しばしば登場する「身体知」並びに「クオリア」という用語について定義する必要がある。

### 3. 暗黙知≡身体知≡クオリア

各分野において、異なる用語が使われている観がある。暗黙知は哲学及び経営学の分野で、また身体知は主にスポーツ科学の分野で、そしてクオリア (qualia) は脳科学の分野で用いられている。広義に捉えれば、いずれの用語も、ほぼおしなべて同じものを指し示すと見なすことができるのではないかと筆者は考えている。なぜならば、言表こそ異なるものの、これらの概念は、客観主義の科学では扱えないという理由でこれまで切り捨てられてきた主観的なものを指しているからである。諸分野で主観の研究に注意が向けられはじめたことに、脳並びに心の解明に対して気運が胎動していることを読み取ることができると同時に、各々の分野が縦割りで行っている現状を垣間見ることができるといえるものである。

#### 3. 1. 暗黙知と身体知

暗黙知については、第2節で説明した通りである。更に言えば、知識というのは、客観的に存在するものではなく、認識主体の身体という基盤があってはじめて成り立つものである。ここに、ポラニーを引く。

知的であろうと実践的であろうと、外界についての我々のすべての知識にとって、その究極的な装置は我々の身体である。我々が目ざめているとき、外界の事物に注目するためにはいつも我々は、その外界の事物と我々の身体との接触について我々がもっている感知に依存している。我々がふつうはけっして対

## メタファーを通しての理解と知識

象として経験することはなくても、いつも我々が発する注目の出発点をなしているもの、また注目が向けられている外界というかたちをとって間断なく我々が経験しているもの、それはこの世界の中で我々の身体をおいてほかにはありえない<sup>15)</sup>。

また、金子は、運動分析の観点から、身体知を次の通り説明している。

……身体とは〈生命的身体〉ことです。つまり、今ここで息づいて動きつつ感じ、感じつつ動ける身体が意味されています。先取りして専門的にいえば、それは動感身体と呼ばれているものです。そのような生命的身体のもつ運動能力を私たちは〈身体知〉ないし〈動感身体知〉と呼ぶのです。身近な表現を使えば、今ここに居合わせている私の身体がわかり（発生始原の身体知）、私が動くときのコツをつかみ（自我中心化の身体知）、カンを働かせることができる（情況投射化の身体知）という働き全体をとりあえず身体知と理解しておいてください<sup>16)</sup>。

スポーツ科学において、身体知というのは、生命としての身体が有する運動能力を指し示す用語として用いられている。金子によると、それは、スポーツ運動におけるコツやカンをはじめ、楽器の演奏技術や工芸職人の匠技の下支えとなる感性質であるという<sup>17)</sup>。更に、身体知は、自然の背後の因果法則を見出し、万人にあてはめるといような、科学知から区別されなくてはならないものであるという<sup>18)</sup>。尚、柴田と遠山は、次の見解を示している。

身体知は、ほぼおしなべて暗黙知であると見なしてよいが、逆に、暗黙知は、（見方によっては）決して身体行為にのみ関わるものではないので、すべて身体知に局限して考えることは、あるいは必ずしも当を得ているとは言えないかも知れない。とはいえ、両者をアナロジーとして捉えることにより開かれてくる視界もありうる……<sup>19)</sup>

上述したこれらの見解を踏まえると、身体知は暗黙知に含まれ、後者の方が広い概念を指し示す用語であると判断される。しかしながら、身体を通して感知されるものは、すべて身体知であると捉えることもできよう。つまり、風の感触、空気の澄み具合、椅子の座り心地、古本の匂い、といったすべての暗黙知は、認識主体が具体的な場に身を置くことで感知されるという意味において身体知であるという位置づけができる。そして身体知というものを、広義に「個人の身体が保有している遺伝的な、かつ経験的な知識」として捉える場合、身体知と暗黙知とほぼ等価であると判断されるのである。

### 3. 2. 暗黙知とクオリア

暗黙知というものを広義の身体知とほぼ等価であると位置づけることができるならば、クオリアとの深い関係性をも否定することはできなくなる。クオリアという用語は、主に脳科学の分野で用いられ、それは認識主体が心中で感じるあるものに対する「質感」のことである。ここに、茂木を引く。

脳科学の分野では、人間が心の中で感じる様々な質感のことを、「クオリア」と呼びま

す。私たちの体験する世界は、抜けるような青空や、ヴァイオリンの音色や、メロンの味といったユニークで鮮烈なクオリアに満ちているのです。およそ意識の中であるものとして把握されるものは、すべてクオリアであると言っても過言ではないでしょう<sup>20)</sup>。

私たちが「光」を目にすると、〈明るい〉〈キラキラ輝く〉〈眩しい〉〈温かい〉といったクオリアを感じているものだが、こういった質感が「光」に対する身体知である。「ばらばら」「ぼたぼた」「さらさら」「べたべた」といった擬音語・擬態語に言い表されているクオリアもあるもの、茂木は「私たちが感じることのできるクオリアのうち、いわゆる「言葉」として指し示し、指し示されるという関係が成立しているものは、ごく一部なのである」<sup>21)</sup>と述べ、その多くが言語化されていないという見解を示している。

私たちはいろいろな甘さを経験している。砂糖と蜂蜜の甘さは別ものであるし、白砂糖と黒砂糖の甘さというのも同じではない。もっと厳密に言えば、蜂蜜はどの植物から蜜が集められたかによって風味が異なる。しかしながら、これらの風味の違いを言葉で表現すると「難しい」の一言に尽きる。また、羊羹、どら焼き、大福、最中、カステラ、シュークリーム、チョコレートなどの多種多様な甘いものからそれぞれ独自の甘さが感知されるものの、一般的に用いられる表現は次のように数種類に限られる、という具合である。

やさしい甘さ  
まろやかな甘さ

すっきりした甘さ  
しつこい甘さ<sup>22)</sup>

人の味覚は多様な「甘さ」のクオリアを感知することのできるものの、それらを表現するとなると微妙な差異をコトバに乗せることができないというのが現実である。因みに、「やさしい」「しつこい」といった言い回しは人の性格を描写する形容詞であるが、味覚を言い表す際のメタファーとして用いられていることにも留意しなくてはならないだろう。要するに、クオリアを言語化するとなると、既に有している知識に頼らなくてはならないということである。

また、同じ楽器の演奏者A氏とB氏の曲の仕上がり具合というのも決して同じではないと言えるものの、その違いを言語化するのは容易ではない。演奏技巧の優劣や感動の有無といったところが精々であり、音の深みや透明感などの音質の差異に至っては感じ取ることはできるにしても、それを表現するとなると、適切なコトバが見つからないものである。

そして、擬音語・擬態語に見られるように、クオリアの一部は言語化されていることに鑑みると、暗黙知とクオリアは厳密には区別されなくてはならないという捉え方もできる。しかしながら、クオリアは認識主体が感じる身体知であり、またクオリアの多くが言語化されていないという見解に基づけば、暗黙知とほぼ同じ位置づけができると判断されるのである。

したがって、暗黙知≡身体知、並びに暗黙知≡クオリアであるならば、身体知≡クオリアと見なすことができる。要するに、暗黙知もクオリアも脳内現象であり、そして脳は身体に関するすべてを司る器官であることを踏まえれば、

身体知というのも脳の記憶であると判断される。「舌が覚えている味」や「体にたたき込んだわざ」といった身体知も、突き詰めると、脳の存在なしにはありえないのである。

### 3. 3. クオリアは知識か

現時点で、クオリアというものを客観主義にもとづく科学的な見地から扱うことは難しい。チャーチランドら (Churchland, P. M. & Churchland, P. S.) によると、

……われわれの感覚の主観的なクオリアは、感覚がわれわれの生物学的、認知的な組織全体においてたまたま果たすかもしれないようないかなる因果的 / 関係的な役割とも別であり、それ以上のあるものだからである。このような内在的クオリアは、1 人称的な視点から容易に識別可能であるが、その本性からして構造なき単純者である。……〈中略〉……クオリアは物理的諸科学にとって不適切な説明対象である<sup>23)</sup>。

である。因って、認識主体の内面で不明瞭に生ずるものを知識と見なすことに対して、しばしば異義が唱えられる。久保田は、「言語化した時点で、知識にはなるかもしれないが、言語化する以前のクオリアそのものを知識とみなすのは早合点ではないだろうか<sup>24)</sup>」という見解を提示している。

しかしながら、実際、クオリアはコトバの意味獲得に肝要な役割を担っている、と筆者は捉えている。次の言い回しにおいて、認識主体は如何にして意味を理解できるのだろうか、を深慮することからはじめるとする。

- (1) 人心の離れた秋の扇さながらに、自民党の苦戦は甚だしい<sup>25)</sup>。
- (2) 自民党は 15 年ぶりに野党に転落する。
- (3) 当然ながら民主党のけいこ不足は否めない。「2 大政党」というだぶだぶの服を、なんとか着られるずうたいに育ったばかりである<sup>26)</sup>。
- (4) 小選挙区制のすさまじいまでの破壊力である。民意の劇的なうねりのなかで、日本の政治に政権交代という新しいページが開かれた。
- (5) 民意は民主党へ雪崩をうった<sup>27)</sup>。
- (6) 国会は歴史的な掃除のただ中にある。いや議事堂のことだ。建設から 73 年、高圧水流による初の汚れ落としで、黒ずんだ御影石に桜色が戻ってきた。議席の布地も張り替わるが、まずはお尻の方がごっそり入れ替わった。……〈中略〉……やりきれない閉塞感を、投票箱に注がれた高圧水が襲った。だが、うつぶんを晴らして喜んでいる時ではない。積年のよどみは黒々とまだそこにあり、日本を桜色に蘇生する持ち時間は限られる<sup>28)</sup>。

(1) の「秋の扇」は、政権交代の実現を強く感じさせる表現である。夏の間活用された扇は秋になって不用となることから、「秋の扇」は〈役にたたないもの〉の意である。寵愛を失った女性が我が身を「秋の扇」にたとえたことに由来するという<sup>29)</sup>。盛夏から涼秋への季節の変化に私たちが感じる〈もの哀しさ〉〈もの寂しい〉といったクオリアが意味に作用していることが認められる。(2) の「転落する」から、足を滑らせて転げ落ちる様子が脳裏に浮かぶ。



怪我や失命につながる〈負の行為〉であることは認識主体の身体知に刻み込まれている。(3)では、「けいこ不足」から〈体力及び精神力は十分か〉、そして「だぶだぶの服」から〈小柄な身体つき〉のイメージが立ち上がり、〈戦えるのか〉や〈頼りない〉という意味獲得に至ることができる。(4)の「破壊力」と「うねり」から〈大きく起伏する波が押し寄せ〉海岸を一掃したような光景が浮かび、また政権交代を「新しいページ」と言い表すことで、これからの物語の展開に対する期待感や緊張感が生じるというものである。(5)においては、〈民衆が一度にどっと移動する勢い〉を「雪崩の勢い」を通して理解することができる。(6)では、2009年8月末の衆議院選挙が政界の「大掃除」のイメージとして捉えられている。有権者の変革への切願は「高圧水流」のように投票箱に注がれ、政界の「黒ずみ」を落とし、健全な「桜色」へ変えようとした。また、議席数が大きく自民党から民主党へ移動したものの、民主党議員には新人が目立つ。彼らは議員席の後ろの方へ着座することから、「お尻の方がごっそり入れ替わった」ということになる。このように、それぞれの表現から認識主体の中に立ち上がるクオリアや身体知といった経験知が意味獲得に作用していることが認められよう。

更なる例を引くと、俳句の季語に「山笑う」「山したたる」「山粧う」「山眠る」というのがあるが、俳句に馴染みのない者にとっても、これらが「春・夏・秋・冬」のどの季語であるのかを言い当てることは、そう難しくない。春山では山桜などが咲きはじめ、はなやかになってくる。春風に吹かれて木々がざわめき、にぎやかになってくる。また暖かくなると、張りつめ

た表情も緩むことから、「山笑う」は春の季語である。夏が始まる梅雨は「山したたる」であり、秋の紅葉で「山粧う」である。そして冬になると、山の動物も植物も活動を停止してひっそりと「山眠る」という具合である<sup>30)</sup>。要するに、メタファーの形成にクオリアは深くかかわっていると見ることができる。換言すると、メタファーを受けて認識主体の中でイメージとともに立ち上がるクオリアが意味の獲得へ導く、というように思惟される。

したがって、意味獲得の根本を担うクオリアや身体知といった経験知が知識でないとする、それは一体何であるのか、ということになる。当然の帰結として、クオリアは知識の一環である、と筆者は捉える次第である。

ここまでのまとめとして、各分野で異なる用語が用いられているものの、暗黙知と身体知、及びクオリアというのは、認識主体の主観という現象であり、形式知へ置き換えることが容易でないために現在の客観主義の科学で扱えないものとして、ほぼ同じものを指し示すと考察を加えることができる。異なる名称が付与されると、それぞれの語のイメージから独自の輪郭線が描かれてしまうような印象を受けるものであるが、拙論文においては、これらはほぼ同じものを指し示すと捉え、議論を進める。

そして、認識主体が環境世界から知を掬い上げる際の手掛かりは、クオリアや身体知であると思惟される。これらを手掛かりにメタファーによって未知なるものを理解してきたのである。

#### 4. メタファーによる理解

ポラニーは、暗黙知から知を掬い上げて表出可能にする方略について次の通り説明している。

……ある事物を暗黙知の接近項として機能させるときには、我々はそれを身体の内部に統合し、あるいはそれを包含しうるように身体を拡大し、結局我々は、その事物の中に潜入する (dwell in) ようになる、ということができる<sup>31)</sup>。

つまり、事物の把握というのは、身体化という方法によって可能になるのである。身体化とは、認識主体の身体知に基づく把握のことであり、言語においてはメタファーの方法に他ならない。加えて、野中を引く。

……われわれの思いを表現する言葉がない場合には、われわれは新たな概念を創造しなければならない。このような場合は、われわれは発想を飛躍させ、異種同質の何かにたとえてわれわれの思いを表現し、それを手掛かりに新たな概念を作り上げていくだろう。このプロセスで使用されるのが発想法、その典型としてのメタファーである<sup>32)</sup>。

レイコフとジョンソン (Lakoff, G. & Johnson, M.) によると、「メタファーの本質とは、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験すること」<sup>33)</sup> である。つまり、すでに獲得した知識を用いて、未知のものを理解する認知方略である。例えば、ドリアンという果物を食べた

このない人に、その味を伝える場合、「甘い香りと玉ねぎの腐敗臭が混ざり合ったクリームのような味」というように説明すれば、ある程度の理解に至ることができよう。味のキーワードは「玉ねぎの腐敗臭」であるが、玉ねぎは一般的な野菜であるからその腐った臭いというのは誰もが経験しているだろうし、これに「甘い香り」と「クリーム」を加えた味のクオリアを想像することで、多少なりとも手掛かりを掴むことができるからである。要するに、コトバというものは、認識主体の経験知にアクセスし、心中にクオリアや身体知を立ち上がらせることである程度の理解に導くものであると思惟される。(因みに、実際のドリアンの強烈な匂いと味は、想像を遥かに凌駕するものであり、これらのクオリアというのは、筆舌のできない暗黙知である。つまり、食べた人にしかわからないクオリアということである。)

このように、コトバには、クオリアや身体知といった経験知を脳裏に立ち上げて理解に至らせる工夫もしくは仕掛けが施されていると見ることができる。久保田は、「おそらく、クオリアの問題は言語の問題とも関係しているであろう」<sup>34)</sup> という見解を示している。しかしながら、言語と脳の連関というのは、言脳問題と呼ばれ、現時点では未解決である。続けて、久保田を引く。

言語がわれわれの脳に依存していることは、よく理解されている。……〈中略〉……しかし、その言語と脳がどのような関わりになっているのかは解決されていない問題である<sup>35)</sup>。

つまり、認識主体は何故コトバの意味を理解できるのであるかという問題は、脳の解明をもって漸く明らかになる。この現状を踏まえたくて、コトバの意味獲得にクオリアが深くかかわっている、というのが筆者の主張であり、その解明の鍵は現時点ではメタファーであろう、と筆者は考えている<sup>36)</sup>。言語は認知機構であるから、言語というものを脳の表出であると捉えれば、メタファー研究を通して、人という認識主体の認知もしくは理解のあり方を垣間見ることができると判断される。

当然の帰結として、従来の言語の恣意性は斥けられる。同時に、メタファーの説明においては、近接性や類似性といった有縁性が提唱される。メタファーを扱うにあたって、まずは言語の恣意性について触れなくてはならない。

## 5. 恣意性 VS. 有縁性

ソシュール (Saussure, F. D.: 1857-1913) の提唱する言語の恣意性は、認知意味論においては斥けられる。言語の恣意性とは、音声のコトバとその対象物、及びその文字表記の間に本質的な関係性はないとする考え方である。つまり、日本語で「イヌ」と呼ばれるものは、英語では dog, フランス語では chien である。これらの記号表現とそれらが指し示すものとの間には、本来何の関係もない。また、これらの文字とこれらの指し示す音との間にも何の関係もないとする考え方である<sup>37)</sup>。

従来の言語学では、形態素 (morpheme) を意味を担う最小の単位として捉えており<sup>38)</sup>、この場合、十分な証拠を提示できないという意味で言語の恣意性を斥けることは容易ではない

観がある。しかしながら、認知意味論の立場から、阿部が「意味を担う最小の自由形式である言語単位は語である」<sup>39)</sup>と提唱するように、意味の最小の単位を語のレベルで捉えると、言語の創造というものが恣意的でないことが窺える。そして、カテゴリーやメタファー研究を通して言語の恣意性は斥けられている<sup>40)</sup>。また、茂木も、脳科学の見地から、言語の恣意性に疑問を呈している<sup>41)</sup>。

嗅覚と聴覚の発達し、よく人になれる四足の動物を日本語においては「イヌ」と呼んでいる。その呼び方が生まれた経緯については、時を経て見え難くなってしまっているものの、呼び名がつくられた何らかの動機があったにちがいないと考える方が道理である<sup>42)</sup>。

ものの名前というのは、その言語の使用者にとって理に適ったものである。例えば、「かすみ草」は細い小枝につく無数の白い小花が霞のように見えることからついた名称である。他方、英語では、babies' breath (赤ちゃんたちの息) と呼ばれている。言表のメタファーは異なるものの、両者ともこの群集花の質感をうまく捉えていることが窺えるというものである。

また、「どくだみ」という名前の響きは、毒草をイメージさせるが、実際は白い可憐な花をつける清楚な植物である。「どくだみ」は俗称で、毒を抑えるという意味の「毒矯み」からきているという。漢方では「十薬」と呼ばれ、これは馬に食べさせると十もの薬効があることに由来する<sup>43)</sup>。どちらも優れた薬草であることから付与された名称である。因みに、中国語では、「魚醒草 (ギョセイソウ)」という名前がつけられているが、これは魚の腐敗したような生臭さが感じられるためであるという<sup>44)</sup>。

要するに、認識主体にとって顕著な質感が捉えられて言語化されていることが窺えよう。言語間において捉えられる質感が異なるというのは、感性の違いとしか言いようがないものの、ものの名前というのは、母語使用者にとっては理に適ったものなのである。換言すると、事物の名称は本質的にメタファーであり、認識主体のそのものに対する理解の仕方を提示していると見ることができる。名付けられた経緯については、時を経て見えなくなってしまっているものも少なくないが、恣意的な命名というのは考え難い。

言語の大部分が比喩であることから推すと、比喩は人間の認識そのものの中に組み込まれているというように考察を加えることができる。つまり、コトバという手段で渾沌から知を掬い上げる際、比喩という方略を用いざるを得ないということである。そして比喩という形式知への置き換えにおいて、手がかりというのがクオリアや身体知といった経験知であると推考されるのである。別の言い方をすると、身体知やクオリアといったものが、メタファーの形成に深くかかわっていると思惟される。後半の議論につなげるために、比喩の種類とその構造について説明を加えるとする。

## 6. 比喩の種類

コトバの大部分は比喩 (figurative language) であると言われる。比喩は広義のメタファー (metaphor) とも呼ばれ、その種類は多様である<sup>45)</sup>。主要なものとしては、濫喩 (catachresis)、換喩 (metonymy)、提喩 (synecdoche)、直喩 (simile)、隠喩 (狭義の

metaphor) があげられる。ここでは、主要な比喩の機能と性質に焦点を当てる。

### 6. 1. 濫喩 catachresis

隠喩が転義を伴う表現を指すのに対して、濫喩の表現法というのは、基本的な使い方であるため、比喩の一種であるという認識を持たないのが普通である。野内によると、「この種の表現法は目立たない形で日常語に取り込まれ、国語の一部になりきっていることが少なくない」である。河口、川床、鍋肌、路肩、空港、根回しなどがあげられ、隠喩的な意味の拡張であることには変わらないが、他の表現方法を有していないという点で隠喩と区別されるものであると位置づけられる<sup>46)</sup>。加えて、赤羽を引く。

……言葉は、隠喩的な表現はもちろんそれが文字通りと考えられる意味をもつ場合でも、そのときどきの状況、あるいは文脈によって、そのつど微妙に意味を変化させていく。その点からいえば、言葉はすべて本質的に隠喩、もっと正確にいえば濫喩であるということになる<sup>47)</sup>。

因って、言語の基底において濫喩が用いられ、これも隠喩的な使用であると認識しなくてはならない。

### 6. 2. 換喩 metonymy

換喩とは、空間的あるいは時間的な隣接関係からの連想によって意味を獲得する方略である。コトバとそれの指し示す対象にズレが生じているものの、日常の経験から得た知識に基づき、そのズレは埋められて理解へ至ることができる。

例えば、「風呂を沸かす」の風呂は〈風呂の湯〉を指し、また「今夜は鍋にしよう」の鍋は〈鍋料理〉を指すという具合である。野内によると、「換喩は事実世界に深くかかわっているだけに完璧を期せばその分類は細目にわたらざるをえなくなり、收拾がつかなくなる」<sup>48)</sup>であり、ここでは主なものを取り上げる。

(1) 〈容器→中身〉

- ・ 大皿を注文して、皆で食べる [= 大皿料理]
- ・ 今朝は水道が凍った [= 水道の水]

(2) 〈付属物→主体〉

- ・ あの黒帯は足技が得意だ [= 初段以上の有段者]
- ・ サッカースタジアムに青いユニフォームが現れた [= 日本サッカーチーム選手]

(3) 〈使われる物→使う人〉

- ・ 白バイに追跡された [= 白バイ隊員]
- ・ あの神輿は威勢がいい [= 神輿の担ぎ手たち]

(4) 〈部分→全体〉

- ・ 頭数はどれくらいになるのか [= 人]
- ・ その仕事には十分な手がある [= 労働力／担当者]

(5) 〈全体→部分〉

- ・ 自転車をこぐ [= 自転車のペダル]
- ・ エアコンをつける [= エアコンのスイッチ]

(6) 〈所在地→機関〉

- ・ あの国会議員は永田町の大物だ [= 政界]
- ・ ウォール街は活気を取り戻しつつある [= 米国の金融業界や証券市場]

(7) 〈製造元→製品／制作者→作品〉

- ・ パナソニックは故障が少ない [= パナソニックの製品]
- ・ トルストイは全部読んだ [= トルストイの作品]

(8) 〈行為→別の行為〉

- ・ どうぞ箸をつけてください [= 食す]
- ・ 店をたたむことになった [= 廃業する]

換喩においては、意味のズレあるいは意味の横滑りが確認できる。この現象を図式化すると、次の通りである。

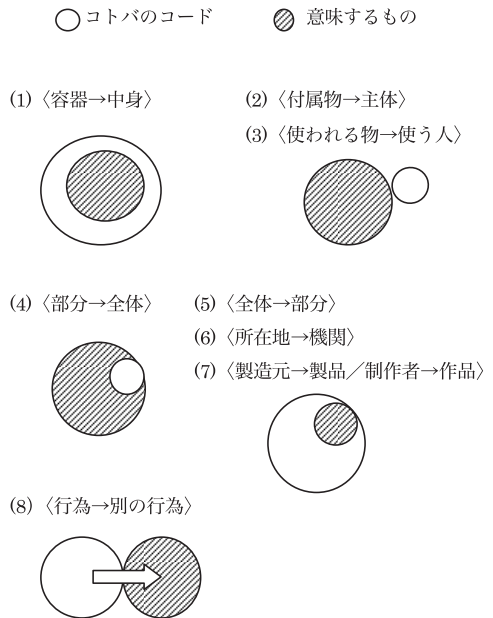


図2. 換喩における意味の獲得

6. 3. 提喩 *synecdoche*

提喩は、〈種〉で〈類〉を、またその逆の〈類〉で〈種〉を指し示すという包摂関係に基づいた意味の伸縮である<sup>49)</sup>。提喩においては、カテゴリーの典型性に基づいた連想から意味の獲得に至ることができる。

(1) 〈種→類〉

- ・この仕事で飯を食っている [= 食物]
- ・彼女は小野小町です [= 美女]

(2) 〈類→種〉

- ・朝食に卵を欠かさない [= ニワトリの卵]
- ・寿司は光りものから食べる [= コハダ, アジ, サヨリなど皮の光っている魚]
- ・喪中は光りものを身につけない [= 貴金属・アクセサリー]

○ コトバのコード      ● 意味するもの

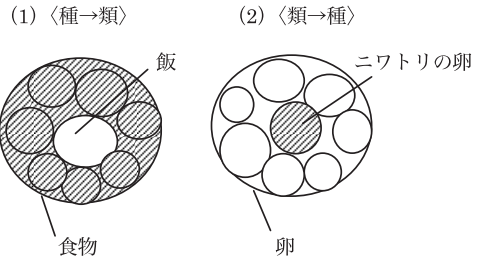


図 3. 提喩における意味の獲得

(1) の「飯」は〈食物〉を指す。こういう指示は、「飯」は食物のカテゴリーの主要な成員であり、最も基本的な食べ物であるという認識があってこそ成り立つものである。「彼女は小野小町です」の提喩も同様に、「小野小町」が美女のカテゴリーの典型的成員であることから、〈彼女は小野小町という名の人だ〉ではなく、〈彼女は美人だ〉という認識が可能になるわけである。一方、(2) の「卵」はウズラやダチョウの卵ではなく、卵のカテゴリーの典型的成員である〈ニワトリの卵〉を指すのが普通である。また、「光りもの」の指示は、典型性に加え、文脈や状況に依存している。環境世界には多種の「卵」、多様な「光りもの」があるが、「卵と言えは……」「寿司で光りものと言えは……」「喪中に光りものと言えは……」という日常の知識が働いている。

提喩における意味獲得を図式化すると、次の通りである。

#### 6. 4. 直喩 simile

「たとえるもの」と「たとえられるもの」、及びこの二つを結びつける「類似性・関連性の根拠」が比喩の構成要素である。そして直喩というのは、「のよう」、「のごとく」、「まるで」、「みたい」(like, as, similar to) などの比喩指標に導かれる根拠が明示されている比喩である。そのため、明瞭で素直な表現法である<sup>50)</sup>。

- ・雪のように白い肌だ
- ・この寒さはまるで冷凍庫だ
- ・こんなことが起こるなんて、悪夢を見ている  
    みたいだ

「雪」で「白さ」が明示され、また「冷蔵庫」で「寒さ」の程度が具体化される。そして「悪夢」と言い表すことで、「ことの大変さ、非現実性」を伝えることができるというものである。直喩は比喩指標に導かれるため、二つのものの結びつきの根拠が明瞭で意味の獲得が容易である。他方、比喩指標とともに根拠が隠れてしまうのが、隠喩である。

### 6. 5. 隠喩 metaphor

直喩に対して、比喩指標の取り除かれた“XはYだ”は隠喩であり、これは直喩に比べると、推理性が高まる表現方法である。また野内は、「隠喩は文彩のなかでも一番目立つ、派手な存在だろう。それに、ひどく知的で高級な印象が強い」<sup>51)</sup>と述べている。なぜなら、それは、カテゴリーを超えて見出された類似性によって、異なる二つのものが結び付けられるという大胆さと、新しい視点に気付かされるという意外性や新鮮さに私たちは強い感銘を受けるからである。「彼は一匹狼だ」「彼女は大和撫子です」「足が棒になる」「そういう言い方は話の腰を折る」「われわれの関係は泥沼だ」「箱物行政はもうたくさんだ」などの表現は、慣用句とは言い、生き生きした印象を受けるものである。

加えて、隠喩は「死んだ隠喩」と「生きた隠喩」に分けられ、前者は「パンの耳」や「心あたたまる話」、または「議論をたたかわせる」「友情をはぐくむ」「愛が芽生える」「想いを寄せる」「空気を読む」といったもので、日常において普通に使われているため隠喩という認識に欠ける言い回しである。これらは、もともとは「生きた隠喩」であったが、使い古されて「死んだ隠喩」へと化したものであると位置づけられる<sup>52)</sup>。

そして、容易に類似点を見出すことのできる隠喩もあれば、そうでないものもある。「彼は電信柱だ」、「彼は家族の寄生虫だ」、「芋虫だった彼女が蝶々になった」の表現は、慣用的な隠喩であるため、〈彼は背が高い〉、〈彼は家族に依存して生活している〉、〈彼女はきれいに変身した〉という意味の獲得が容易である。他方、「週末の父はトドです」の表現においては、一

般的でないため推理に少々時間を要すかもしれない。「父親」と「トド」の間に、〈寝そべてゴロゴロしている〉という具合に類似点を見出すことができれば、馴染みの薄い隠喩でも理解に至ることができる。この隠喩における意味獲得を図式化すると、次の通りである。

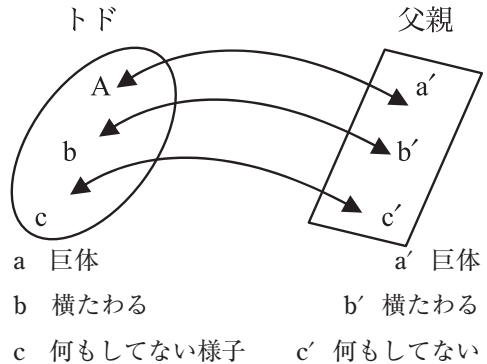


図3. 隠喩による意味の獲得

同時に、隠喩は新しいものの見方を開拓してくれる。レイコフとジョンソンは、「メタファーは理解という人間の行為にとって欠くべからざるものであり、われわれの生活の中に新たな意味と新たな現実を創り出すためのメカニズムであるとみなしている」<sup>53)</sup>と説いている。

更に、隠喩というのは、視点を変えると提喩であるという見方が成り立つ<sup>54)</sup>。既述した通り、提喩はカテゴリーの典型性に基づいた連想から意味を獲得するものである。つまり、「父親」も「トド」も〈巨体を横たえ、何もしない動物〉の類に属しているというように捉えれば、「週末の父はトドです」の表現は提喩であり、隠喩と提喩は同系の比喩であると言える。

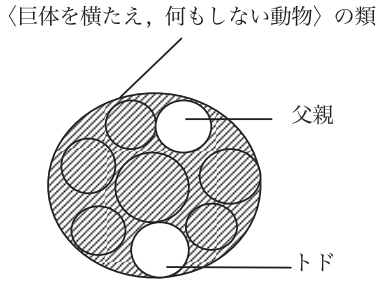


図4. 提喩としての隠喩

## 6. 6. 比喩による理解

喚喩並びに提喩では、‘その類’あるいは‘おおよそそういうもの’という具合に、空間的・時間的に近接関係にあるものを‘一つのまとまり’として捉らえていることが窺える。その際の意味のズレや横滑りというのは、日常における経験知から埋めることができるのである。そして直喩や隠喩においては、カテゴリーを超えて、異種同質なものが‘類似したもの’もしくは‘似通ったもの’として結びつけられている。換言すると、これはわかっていることに基づいてわかりにくいものを理解する方法であり、前者が受け手に作用し心にイメージを立ち上がらせ、クオリアや身体知といった経験知から後者の意味獲得へと導く認知方略である。また別の視点から、隠喩を提喩として捉えることができることに鑑みると、これらの分類も便宜的であり、要は近接性や類似性に基づき‘そのようなもの’として把握するというのが、基本的な比喩の法則であろうと見ることができる。

要するに、言語の大部分が比喩であり、コトバはすべて本質的に隠喩であるという見解に基づけば、人という認識主体は、近接性や類似性を手掛かりに渾沌から知を掬い上げることで、漸く環境世界を認識しているというように考察

を加えることができる。コトバというものを通しての私たちの理解とは、客観的な、絶対的なものではなく、比喩の方略に形を与えられているのである。

## 7. メタファーの機能と性質

メタファー（広義で用いる）は、抽象物や把握が容易でないものを、既に有している知識の構造を通して理解するというものである。楠見は、メタファーによって抽象的な概念の意味構造が変化し、イメージが浮かびやすくなることから、意味の獲得が容易になると述べている<sup>55)</sup>。加えて、ブラック（Black, M.）によると、メタファーというのは、最適な譬えにより強調（emphasis）が生じると同時に、精巧な関連性により共鳴（resonance）が引き起こされるものである<sup>56)</sup>。例えば、「青春」という抽象概念は、次のメタファーによって理解しやすいものになる。

- (1) 青春は青い果実である。
- (2) 毎日練習に明け暮れた。俺たちの青春は熱かった。
- (3) 希望と不安、情熱と挫折、憧れと自己嫌悪は青春の光と影である。
- (4) 若い私は不器用で、いつも「当たって砕ける」でしたから、傷だらけの青春でした。

(1) では、熟した果実は赤や橙、または黄色という経験知に対して、「青い果実」の〈固い〉〈酸っぱい〉イメージから〈未成熟さ〉を理解することができる。(2) については、「熱い」から〈感情が高まった状態〉の意味獲得は容易



である。興奮すると、体温が上がり熱くなるという身体知は誰もが有しているものである。(3)では、「希望、情熱、憧れ」に〈前向き〉で潑刺とした姿が感じられるのに対して、「不安、挫折、自己嫌悪」には〈下向き〉で悩む姿が浮かぶ。つまり、前向きの姿勢で陽の〈光〉を浴びるものの、下を向けば光に映し出された〈影〉が見えるわけであり、光と影は表裏一体であるという経験知に基づき、意味獲得へ至ることができる。そして、(4)においては、身体を有する生命体として「傷」がどういうものかを知らない者はいないだろう。この経験知を通して〈心の痛み〉の意味獲得はいとも容易になる。

更に、具象物とは言え、「人間」というのは複雑な様相を呈する存在であり、把握の容易でない生き物であるが、メタファーを通すと理解しやすいものへと変化する。

(5)「人間は植物である」のメタファー

- ・息子は大事な一粒種ですから、大切に育てました。
- ・なかなか芽が出ない人もいれば、すぐに花を咲かせる人もいる。
- ・不調のため一時期引退も囁かれた選手だが、見事に返り咲いた。
- ・一花咲かせて、パッと散る流行歌手もいる。
- ・あの子はまだ蕾だけど、じきに大輪の花になる。
- ・いつか、努力が実を結ぶ。
- ・死んで花実が咲くものか。
- ・気持ちは若いですよ、まだ枯れていない<sup>57)</sup>。

人間の育成というものを「芽→開化→散る／枯れる」、また女性の成熟を「蕾→開化」という植物の成長過程を通して理解していることが窺えよう。粉山によると、「植物の成長過程」に関する表現を用いることによって、相対的に理解しにくい「人間の営み」についてより印象的に、効果的に表現できる<sup>58)</sup>である。植物に関する経験知を通して、人間の成長や営みを理解するわけである。

(6)「人間は鳥である」のメタファー

- ・彼は芸術家の卵です。
- ・くちばしが黄色い奴にそんなことを言われたくない。
- ・就職したんだし、そろそろ親から巣立ちしないとね。
- ・世界に羽ばたく日を夢見ながら練習する。
- ・若い二人は、駅前の小さな安アパートに愛の巣を構えた。
- ・籠の鳥の生活に嫌気がさして、放浪の旅に出た。
- ・古巣に戻って、昔の仲間たちと再会した<sup>59)</sup>。

「卵→雛→巣立ち→飛翔」という鳥の成長過程に人間のものを投射しているメタファーである。鳥は巣離れし、空を飛ぶ動物であるという知識を通して人間の成長を理解するわけである。但し、「卵」の表現に関しては、「医者の卵」や「アナウンサーの卵」とは言うものの、「店員の卵」や「サラリーマンの卵」とは言わないことから、専門的分野に限られるという見方ができる<sup>60)</sup>。

メタファーを通しての理解と知識

(7) 「人間は天気である」のメタファー

- ・あのお天気屋とは付き合いが難しい。
- ・そのコメントのお蔭で、気持ちが晴れました。
- ・気晴らしに散歩でもしよう。
- ・心の曇りもとれて、晴れ晴れとした表情だった。
- ・彼女は不安げに顔を曇らせて、うつむいた。
- ・知らせを聞いて、私の心に暗雲が垂れ込めた。
- ・今、部長は低気圧だから、その話は後にした方がいい<sup>61)</sup>。

日本列島においては、天気は頻繁に変わるものである。また、「晴れ」は好ましい天気であるのに対し、「曇り」や「雨降り」は活動が阻まれることから、好ましくない天気である。更に、「曇り→雨降り」という天気の変化は、誰もが経験している自然界の現象である。これらの天気に関する経験知が「人間の心の状態や変化」を理解する際にも用いられている<sup>62)</sup>。

(8) 「人間は機械である」のメタファー

- ・日本企業は従順なロボットを求めている。
- ・A投手は肩の故障で、試合に出られない。
- ・ガス欠で、力が入らない。
- ・壊れる前に、休息することです。
- ・よい仕事をするには、充電も必要です。
- ・社員一人ひとりが歯車となって、組織を動かしていく。
- ・勉強になかなかエンジンがかからず、怠けていました。
- ・あの人は怒りだしたら、ブレーキがきかない。

- ・中だるみしないように、この辺でメンバーたちのねじを巻いておこう<sup>63)</sup>。

「機械」は決められたことを正確に行うが、意志や判断力を有するものではなく、ガソリンや電気で作動し、歯車やネジなどの部品、及びエンジンやブレーキを備え、故障することもある、というように認識されている。これらの経験知は、人間の身体について理解する際にも作用するということである<sup>64)</sup>。

このように、メタファーは文彩に用いられるだけではなく、日常の言い回しの中に溢れている。別の言い方をすると、メタファーというのが人という認識主体の普遍的な理解の仕方であると見ることができる。ここに、レイコフとジョンソンを引く。

……「語句的語彙」が、ひとつのメタファーから成る概念によって一貫した構造を与えられている。……〈中略〉……御自分ではメタファー的な表現をしているとは思わず、その場にふさわしい当たり前な日常的言い回しをしているとお思いになるだろう。だが、それにもかかわらず、その場の状況に関するあなたの言い回しも、発想も、経験の仕方ですら、メタファーによって構造を与えられることになるだろう<sup>65)</sup>。

メタファーは認識主体の経験知にアクセスし、心中にイメージを立ち上げる。クオリアや身体知といったものはイメージに包含されると推考される。そして、認識主体はこれらを手掛かりに未知のもの理解に至るという認知のメカニズムを窺い知ることができる。要するに、メタ

ファーは認知の方略であると同時に、クオリアや身体知といった経験知が意味の獲得に肝要な役割を担っていると考察を加えることができる。

更に、メタファーは有効な意味伝達的手段であるが、もう一方において、それはものごとの一部分を浮かび上がらせ、他の部分に影をつくってしまうという性質をも持ち合わせている。

## 8. メタファーは「方略」であって、「真」ではない

抽象的な概念や複雑な様相を呈するものを理解する上で、メタファーは不可欠である。また、これまで気づけなかった概念の側面に気づかせてくれるのもメタファーである。しかしもう一方で、レイコフとジョンソンが「メタファーによって成り立っている概念というのは、あくまであるものを部分的にあらわすものであって、そのものの全体をあらわすわけではない<sup>66)</sup>と指摘するように、それぞれのメタファーは概念あるいは事象の一つの顕著な側面に光を当てるが、その全体を照らし出すものでないということを知っておく必要がある。第7節で紹介した通り、「青春」も「人間」も複雑な様相を呈する概念であるが、それぞれの一つの面が捉えられてメタファーという形式知に掬い上げられている。他の語られなかった部分については、受け手が知的努力によって埋めなくてはならないということになる。ここでの説明を図式で表わすと、図5の通りである。

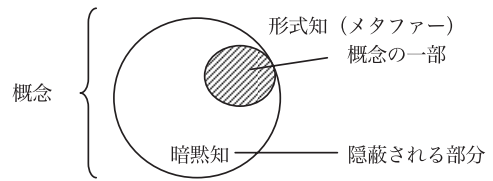


図5. メタファーの性質

したがって、おのおののメタファーというのは概念の一つの側面のみを浮かび上がらせるにすぎないという見方において、それは真実とは呼べないものである。つまり、メタファーは環境世界から知を掬い上げる有効な手段なのであって、その言表そのものが真であるということではない。ここに、赤羽を引く。

隠喩が生き生きと感じられるとき、隠喩によってものが生き生きと描き出されるとき、それが真理を語っているように、そこで語られていることが本当であるように、現実であるように思えてくるのである。そうした体験によって、私たちはその言葉の真を納得してしまう。つまり、言表を前にして、生き生きとした開示というべき体験をすると、その言表は事象と一致しているように思われてくるのである。重要なのは、そのときの真理性がそれがあらわしているとされる現実に依拠するのではない、という点である<sup>67)</sup>。

続けて、赤羽を引く。

隠喩的な言葉には真実味がある、あるいはリアリティがあるというだけで十分ではないか。隠喩的言表が生み出すのは「真実」であるというより「真実らしさ」であること、そしてそれだけで十分人を動かす力をもっているこ

メタファーを通しての理解と知識

とを認める必要があるのだ<sup>68)</sup>。

更に、レイコフとジョンソンによると、

真実は、したがって、絶対的なものでもなく客観的なものでもなく、理解に基づいているのである。故に、文は、固有の、客観的に与えられた意味をもっていない。そして、コミュニケーションとはそうした意味をただ単に伝えるということだけではあり得ない<sup>69)</sup>。

である。要するに、際立てられる面があると同時に隠蔽される面があるという意味において、メタファーは真実を指し示すものではないが、隠喩的言表には「真実らしさ」が醸し出され、説得力を有するのである。加えて、レイコフとジョンソンが指摘する通り、真実というものは、そもそも客観的なものではなく、認識主体によってどのように把握されるのかという問題である、と考えなくてはならないのである。

メタファーという方略においては、ある事柄や概念に関する総ての知を一度に掬い上げることはできないものの、多角的な視点及び観点から掬い上げられた知の総和によって、ことの全貌に近づくことができると思惟される。事象・現象というのは複雑な様相を呈するものである。そのため、複雑な多面体をあらゆる角度から捉えることで、漸くことの全貌が見えてくる。つまり、複数のメタファーを通して漸く「真実」に近づくことができるというように考えを巡らすことができる。要するに、真実あるいは客観的な理解というものは、コトバを超えたところにある、と説くことができよう。

因みに、日本文化には「話半分聞く」や

「話が上手すぎる」といった具合に、コトバというものに信頼をおかない傾向が窺え、このことはしばしば欧米の言語至上主義と対比されるが、この日本文化の特質は、先人たちがコトバの本性というものを感知していた、もしくは見抜いていたことによる、というように読むこともできよう。

## 9. まとめ

言語はすべて本質的にメタファーであることを踏まえると、メタファーこそが人という認識主体の環境世界を理解する方略——既に有している知識の構造を通して、未知なるものの認識に至る——であるというように捉えることができる。渾沌を整理するとともに、その中から知識を掬い上げ、コトバという形式知に置き換えるという意味において、メタファーは有効な手段であると位置づけられる。しかしながら、メタファーは、ことの全貌を映し出すものではなく、顕著性が捉えられることで一部分のみを浮かび上がらせるという性質を有するものである。つまり、メタファーを通しての理解というのは、部分的な理解にすぎないものである。したがって、コトバという形式知に対して、掬い上げることのできない部分が暗黙知として残されてしまうことになる。ポラニーのコトバを用いれば、「言葉を用いたとしても、我々には語ることのできないなものかがあとにのこされてしまう」であり、そして「それが相手に受けとられるか否かは、言葉によって伝えることができずにのこされてしまうものを、相手が発見するか否かにかかっている」ということになる<sup>70)</sup>。

当然の帰結として、メタファーは「真実」を

照らし出すものではなく、あくまでもそこへ導くための方略であると捉えなくてはならない。コトバで語られなかった部分に気づくか否かは受け手次第である。武術研究者である甲野は、

……言葉による説明というのは、公平で誰にでも教えられるけれど、その先にある大きな世界を失わせてしまうという意味で、長所即欠点だと思うのです<sup>7)</sup>。

と指摘し、コトバの限界を示唆している。人はコトバという手段で、ある程度理解へ到達することができる。しかしながら、コトバを駆使しても、語られない部分が残されてしまうということである。そして、コトバの限界を補うのが、クオリアや身体知といった経験知であると判断される。これらは、人という種に遺伝的に備わった部分も含まれるものの、認識主体が経験を通して獲得する知であると位置づけられる。コトバというコードを受けて、心中に鮮明に立ち上がるクオリアや身体知といった経験知がコトバを凌駕し、つまり語られなかった暗黙知を埋めて十全な理解へと導いてくれる、というように思惟される。因みに、これらがどのように作用しているのかについては、意識の解明を待たなくてはならない問題である。

更に、クオリア体験や身体知というものがコトバの意味獲得に作用するという見解を踏まえれば、コミュニケーション教育とは、単なる語彙力の増強や言語表現力の向上といった問題にとどまるものではないと見ることができよう。最適なメタファーを用いて、暗黙知から知を掬い上げ、形式知に置き換えることができるか。また、コトバに乗せられずに暗黙知として残っ

てしまうものをどれだけ感知することができるか、といった問題であると筆者は捉えている。豊かな身体知やクオリア体験を有していない者は、コトバの意味獲得が容易でないとともに、経験知が貧弱な場合、想像力や創造力も働かない、というように考察を加えることができる。言語は認識主体の身体性に基づき構築されており、言語理解の基盤というのもまた身体性であるという観点に立てば、コミュニケーション教育においては、母語の習得とともに豊かな経験知の会得が不可欠である、と説くことができる。

注—————

- 1) Polanyi, M. (1966). *The Tacit Dimension*. Mass: Douleday & Company, Inc. p. 6 [佐藤敬三訳『暗黙知の次元——言語から非言語へ』(紀伊國屋書店, 1980年), 17頁。]
- 2) 坂原 茂「認知的アプローチ」『岩波講座言語の科学4 意味』(岩波書店, 1998年), 84頁。
- 3) 同上, 84-87頁。
- 4) 松本 曜「認知意味論とは何か」松本 曜編『シリーズ認知言語学入門(第3巻) 認知意味論』(大修館書店, 2003年), 3頁。
- 5) 『朝日新聞』「天声人語」(朝日新聞社, 2009年8月16日朝刊), 1頁。
- 6) 國廣哲彌『意味論の方法』(大修館書店, 1982年), 3頁。／池上嘉彦『意味論』(大修館書店, 1975年), 38頁。／國広は、指示物説、概念説、行動主義的意味観、用法説、意味関係説、弁別の特徴説、意義素説を、また池上は、心的映像(イメージ)説、概念説、指示説、反応説、場面説、傾向説、連想説、分布説、対立説、意味関係説等を提示している。(國廣, 前掲書, 3-95頁。／池上, 前掲書, 38-70頁。)
- 7) 松本, 前掲書, 8-9頁。
- 8) 茂木は、クオリア(=質感)の多く言葉にな

- っていないという見解を示している。(茂木健一郎『意識とはなにか——〈私〉を生成する脳』(筑摩書房, 2003年), 51頁。)
- 9) Polanyi, *op. cit.*, p. 4 [邦訳 15頁] / 但し, 多種多様な写真のコレクション等を用いる方法によって, 認知した(あるいは似通った)モノを選び出し, 他者に伝えることはできるという説明が加えられている。(Polanyi, *op. cit.*, pp. 4-5 [邦訳 15-16頁])
  - 10) 大崎正瑠「暗黙知を理解する」『東京経済大学人文自然科学論集』第127号, (東京経済大学人文自然科学研究会, 2009年), 26-30頁。/ (b)の「表出困難だが伝達可能な知識」は, 大崎(2000年)においては暗黙知に含まれると論じられていることから, 位置づけが微妙であることが窺える。(大崎正瑠「コミュニケーションにおけるデジタルとアナログ」『コミュニケーション科学』第13号, (東京経済大学コミュニケーション学会, 2000年), 7-8頁。)
  - 11) 野中郁次郎・竹内弘高『知識創造企業』(東洋経済新聞社, 1996年), 95頁。
  - 12) Polanyi, *op. cit.*, p. 6 [邦訳 17頁]
  - 13) 野中郁次郎『知識創造の経営』(日本経済新聞社, 1990年), 57頁。
  - 14) 赤羽研三『言葉と意味を考える II』(夏目書房, 1998年), 91頁。
  - 15) Polanyi, *op. cit.*, pp. 15-16 [邦訳 32頁]
  - 16) 金子明友『身体知の形成(上)』(明和出版, 2005年), 2頁。
  - 17) 同上, 2-6頁。
  - 18) 金子明友『身体知の構造——構造分析論講義』(明和出版, 2007年), 6-7頁。
  - 19) 柴田庄一・遠山仁美「『暗黙知』の構造と『創発』のメカニズム——「潜入」と「包括的統合」の論理」, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科編『言語文化論集』26(2)(名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 2005年), 77頁。
  - 20) 茂木健一郎『クオリア立国論』(ウェッジ, 2008年), 9頁。/ 茂木は, 二種類のクオリア——感覚的クオリアと志向的クオリア——について考察を加え, 前者は色やテクスチャ(きめ)などの質感を指し, 後者は経験やその時々コンテクスト, 文化的背景に依存し, ダイナミックに変化すると説明している。そして心中で何か外界のものを表象する際, これら二種類のクオリアのマッチングがとられていると説いている。(茂木健一郎『心を生み出す脳のシステム——「私」というミステリー』(日本放送協会, 2001年), 46-70頁。)
  - 21) 茂木(2003年), 前掲書, 51頁。
  - 22) 辻本智子「比喩で味わう——ことばと身体の深い関係」瀬戸賢一・他『味ことばの世界』(海鳴社, 2005年), 137-140頁。
  - 23) Churchland, Paul M. & Churchland, Patricia S. (1997). Recent works on consciousness: philosophical, theoretical, and empirical. 『認知科学』4-3, p. 46 [信原幸弘訳「最近の意識研究——哲学的, 論理的, 経験的観点から」苧坂直行編著『意識の認知科学——心の神経基盤』(共立出版, 2000年), 95頁。]
  - 24) 久保田進一「クオリアと言語の問題——チャーチランドの議論をめぐって」『Nagoya Journal of Philosophy』4, (名古屋大学情報科学研究科情報創造論講座, 2005年), 26頁。
  - 25) 『朝日新聞』「天声人語」(朝日新聞社, 2009年8月27日朝刊), 1頁。
  - 26) 『朝日新聞』「民主308政権交代——「鳩山首相」誕生へ」(朝日新聞社, 2009年8月31日朝刊), 1頁。
  - 27) 『朝日新聞』「社説: 民主圧勝 政権交代——民意の雪崩を受け止めよ」(朝日新聞社, 2009年8月31日朝刊), 3頁。
  - 28) 『朝日新聞』「天声人語」(朝日新聞社, 2009年8月31日朝刊), 1頁。
  - 29) 新村 出編『広辞苑 第3版』(岩波書店, 1987年), 22頁。
  - 30) 同上, 2415頁。
  - 31) Polanyi, *op. cit.*, p. 16 [邦訳 33頁]

- 32) 野中, 前掲書, 108頁。
- 33) Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. p.5 [渡部昇一・他訳『レトリックと人生』(大修館書店, 1986年), 6頁。]
- 34) 久保田, 前掲書, 30頁。
- 35) 同上, 29頁。
- 36) クオリアを感知して意味を紡ぎ出すのは、私たちの心であり、脳に宿る意識であると見ることができる。しかしながら、クオリアというのは、心脳問題並びに意識の問題であり、これらは現在の客観主義の科学では扱うことの難しい問題であると位置づけられている。因って、コトバの意味問題というのも意識の解明をもって漸く究明される難問であるということになる。(渡邊美代子「コトバの意味問題——クオリアを中心に前言語的な観点から」『ヒューマン・コミュニケーション研究』(日本コミュニケーション学会, 2005年5月), Vol. 33, 67-98頁。/——「コトバの意味問題 II——志向性・志向的クオリアを中心に文化的偏向の観点から」『高崎商科大学紀要』第20号(高崎商科大学, 2005年12月), 9-33頁。)
- 37) ソシユールは、言語記号は主体の差異化作用による分節の結果生まれると説いている。彼によると、世界ははじめから明瞭に分節されているわけではなく、連続体である世界を主体が恣意的に切り取っているという。そして切り取った結果を言語記号(シニエヌ)と呼び、それを概念=記号内容(シニフィエ)と聴覚映像=記号表現(シニフィアン)の結合であるとした。(ソシユール, F.D. 小林英夫訳『一般言語学講義』(岩波書店, 1972年), 95-101頁, 157-171頁。)
- 38) 田中春美・他編『現代言語学辞典』(成美堂, 1988年), 40頁。
- 39) 阿部泰明「意味論の基盤」『岩波講座言語の科学4 意味』(岩波書店, 1998年), 35頁。
- 40) 野村益寛「認知言語学」辻 幸男編『ことばの認知科学』(大修館書店2001年), 132-134頁。/Lakoff, G. & Johnson, M. *op. cit.*, [邦訳]/Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. [池上嘉彦・他訳『認知意味論』(紀伊國書店, 1993年)。]
- 41) 茂木 (2001年), 前掲書, 217-218頁。
- 42) 漢字の「犬」については、その動物の姿からつくられていると言われ、有縁性が窺えるというものである。  
「漢字原子」  
<http://www5b.biglobe.ne.jp/~shu-sato/kanji/gensi.htm>
- 43) 「草木図譜」  
[http://aquiya.skr.jp/zukan/Houttuynia\\_cordata.html](http://aquiya.skr.jp/zukan/Houttuynia_cordata.html)
- 44) 「養命酒——生薬百選」  
<http://www.yomeishu.co.jp/genkigenki/crude/060825/>
- 45) 野内良三『レトリック辞典』(国書刊行会, 1998年)。
- 46) 同上, 305-306頁。
- 47) 赤羽, 前掲書, 91頁。
- 48) 野内, 前掲書, 76頁。
- 49) 瀬戸賢一『認識のレトリック』(海鳴社, 1997年), 161-177頁。
- 50) 野内, 前掲書, 21-27頁。
- 51) 同上, 18頁。
- 52) 同上, 19頁。
- 53) Lakoff, G. & Johnson, M. *op. cit.*, pp. 195-196 [邦訳 277頁]
- 54) 佐藤によると、「本質的に、提喩と隠喩は同系の言葉のあやである。そしていずれも、語句の意味的な類似性にもとづく比喩であるという点が共通で、現実的な共存性にもとづく比喩である換喩とは対立するものと言わなければならない」である。(佐藤信夫『レトリック感覚——ことばは新しい視点をひらく』(講談社, 1978年), 162頁。)

- 55) 楠見 孝『比喩の処理過程と意味構造』(風間書房, 1995年), 122頁。
- 56) Black, M. (1993). More about Metaphor. In A. Ortony (Ed.) *Metaphor and Thought*. (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press. pp. 25-35.
- 57) 粉山洋介『日本語は人間をどう見ているか』(研究社, 2006年), 13-43頁。
- 58) 同上, 43頁。
- 59) 同上, 45-67頁。
- 60) 同上, 49頁。
- 61) 同上, 69-89頁。
- 62) 同上, 70-71頁。
- 63) 同上, 91-121頁。
- 64) 同上, 92-93頁。
- 65) Lakoff, G. & Johnson, M. *op. cit.*, p. 51 [邦訳 87頁]
- 66) *Ibid.*, p. 13 [邦訳 16頁]
- 67) 赤羽, 前掲書, 143-144頁。
- 68) 同上, 145頁。
- 69) Lakoff, G. & Johnson, M. *op. cit.*, p. 197 [邦訳 278-279頁]
- 70) Polanyi, *op. cit.*, p. 6 [邦訳 17頁]
- 71) 茂木健一郎・甲野善紀『響きあう脳と身体』(バジリコ株式会社, 2008年), 81頁。

#### 参考文献

- 赤羽研三『言葉と意味を考える II』(夏目書房, 1998年)。
- 『朝日新聞』「天声人語」(朝日新聞社, 2009年8月16日朝刊), 1頁。
- 「天声人語」(朝日新聞社, 2009年8月27日朝刊), 1頁。
- 「天声人語」(朝日新聞社, 2009年8月31日朝刊), 1頁。
- 「民主308政権交代——「鳩山首相」誕生へ」(朝日新聞社, 2009年8月31日朝刊), 1頁。
- 「社説: 民主圧勝 政権交代——民意の雪崩を受け止めよ」(朝日新聞社, 2009年8月31

- 日朝刊), 3頁。
- 阿部泰明「意味論の基盤」『岩波講座言語の科学 4 意味』(岩波書店, 1998年), 1-38頁。
- 池上嘉彦『意味論』(大修館書店, 1975年)。
- 大崎正瑠「コミュニケーションにおけるデジタルとアナログ」『コミュニケーション科学』第13号, (東京経済大学コミュニケーション学会, 2000年), 3-13頁。
- 「暗黙知を理解する」『東京経済大学人文自然科学論集』第127号, (東京経済大学人文自然科学研究会, 2009年), 21-39頁。
- 金子明友『身体知の形成(上)』(明和出版, 2005年)。
- 『身体知の構造——構造分析論講義』(明和出版, 2007年)。
- 楠見 孝『比喩の処理過程と意味構造』(風間書房, 1995年)。
- 國廣哲彌『意味論の方法』(大修館書店, 1982年)。
- 久保田進一「クオリアと言語の問題——チャーチランドの議論をめぐって」『Nagoya Journal of Philosophy』4, (名古屋大学情報科学研究科情報創造論講座, 2005年), 17-33頁。
- 粉山洋介『日本語は人間をどう見ているか』(研究社, 2006年)。
- 坂原 茂「認知的アプローチ」『岩波講座言語の科学 4 意味』(岩波書店, 1998年), 83-124頁。
- 佐藤信夫『レトリック感覚——ことばは新しい視点をひらく』(講談社, 1978年)。
- 柴田庄一・遠山仁美「「暗黙知」の構造と「創発」のメカニズム——「潜入」と「包括的統合」の論理」, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科編『言語文化論集』26(2)(名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 2005年), 73-89頁。
- 新村 出編『広辞苑 第3版』(岩波書店, 1987年)。
- 瀬戸賢一『認識のレトリック』(海鳴社, 1997年)。
- ソシュール, F.D. 小林英夫訳『一般言語学講



義』(岩波書店, 1972年)。  
 田中春美・他編『現代言語学辞典』(成美堂, 1988年)。  
 Churchland, Paul M. & Churchland, Patricia S. (1997). Recent works on consciousness: philosophical, theoretical, and empirical. 『認知科学』, 4-3, pp. 45-55. [信原幸弘訳「最近の意識研究——哲学的, 論理的, 経験的観点から」 荻坂直行編著『意識の認知科学——心の神経基盤』(共立出版, 2000年), 93-112頁。]  
 辻本智子「比喩で味わう——ことばと身体の深い関係」瀬戸賢一・他『味ことばの世界』(海鳴社, 2005年), 137-161頁。  
 野内良三『レトリック辞典』(国書刊行会, 1998年)。  
 野中郁次郎『知識創造の経営』(日本経済新聞社, 1990年)。  
 野中郁次郎・竹内弘高『知識創造企業』(東洋経済新聞社, 1996年)。  
 野村益寛「認知言語学」辻 幸男編『ことばの認知科学』(大修館書店2001年), 132-146頁。  
 Black, M. (1993). More about Metaphor. In A.Ortony (Ed.) *Metaphor and Thought*. (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press. pp. 19-41.  
 Polanyi, M. (1966). *The Tacit Dimension*. Mass: Doubleday & Company, Inc. [佐藤敬三訳『暗黙知の次元——言語から非言語へ』(紀伊國屋書店, 1980年)。]  
 松本 曜「認知意味論とは何か」松本 曜編『シリーズ認知言語学入門〈第3巻〉認知意味論』(大修館書店, 2003年), 3-16頁。  
 茂木健一郎『心を生みだす脳のシステム——「私」というミステリー』(日本放送協会, 2001年)。  
 ——『意識とはなにか——〈私〉を生成する脳』(筑摩書房, 2003年)。  
 ——『クオリア立国論』(ウェッジ, 2008年)。  
 茂木健一郎・甲野善紀『響きあう脳と身体』(パジロ株式会社, 2008年)。

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. [池上嘉彦・他訳『認知意味論』(紀伊國書店, 1993年)。  
 Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. [渡部昇一・他訳『レトリックと人生』(大修館書店, 1986年)。  
 渡邊美代子「コトバの意味問題——クオリアを中心に前言語的な観点から」『ヒューマン・コミュニケーション研究』(日本コミュニケーション学会, 2005年5月), Vol. 33, 67-98頁。  
 ——「コトバの意味問題 II——志向性・志向的クオリアを中心に文化的偏向の観点から」『高崎商科大学紀要』第20号(高崎商科大学, 2005年12月), 9-33頁。

参考サイト

「漢字原子」  
<http://www5b.biglobe.ne.jp/~shu-sato/kanji/gensi.htm>  
 「草木図譜」  
[http://aquiya.skr.jp/zukan/Houttuynia\\_cordata.html](http://aquiya.skr.jp/zukan/Houttuynia_cordata.html)  
 「養命酒——生薬百選」  
<http://www.yomeishu.co.jp/genkigenki/crude/060825/>